

群集行動研究の視角

—創発規範論の理論展開とその経験的研究についての意味—

吉 田 竜 司

本稿では、「連続性アプローチ」と呼ばれる群集行動研究への一視座を念頭に置いて、ターナー (Ralph H. Turner) とキリアン (Lewis M. Killian) によって提出された「創発規範論 (emergent norm approach)」と呼ばれる集合行動に関する理論のうち、群集行動に関する彼らの論議に焦点を当て、その理論構成の紹介と、それに対する批判から明らかになった理論的問題点を検討する。そして、彼らが批判を通して行なった理論的展開過程に、群集行動の経験的研究についての積極的意義を見いだすことができると同時に、そこから抽出される理論の「対称性」が、連続性アプローチの方法論的支柱でもあることを指摘する。

はじめに

これまで、群集行動の社会学的な経験的研究は、日本においては、ほとんどなされてこなかった。このことは、日本の集合行動の研究状況に特有の傾向となつてあらわれている。それは「集合行動研究の社会運動論傾斜」と「群集行動研究の理論傾斜」の二点に分かれる。

戦後日本における集合行動の経験的研究は、群集行動に比べて社会運動に極めて大きく傾斜した形で展開してきた。その理由として以下の二点を挙げることができる。一つには、日本の社会運動の研究史がマルクス主義的色彩の濃いものであったことと関連して、研究と実践との関係性をとりわけ強く要請されてきた点が挙げられる。特に一九五〇年代後半から勤務評定反対闘争、警察官職務執行法反対闘争、安保反対闘争から一九六〇年代に噴出したさまざまな運動へといたる一連の大規模な大衆運動が興隆・衰退を繰り返す中で、この立場は、未組織な群集行動を、体制社会の変革の手段としては実践的価値の低いものとしてみなすようになった⁽¹⁾。二つには、アメリカの社会運動論の動向と日本でのその導入が挙げられる。周知のように、一九七〇年代以降、社会運動論の新たな流れとして台頭

⁽¹⁾ 「歪みや偏りを内蔵し、見戯性によって彩られていた [高橋、一九八五:四]。」

した資源動員論が日本に紹介されて以来、現在このアプローチは、社会運動研究の主要なアプローチの一つとなっている。資源動員論にはさまざまな立場があるが、通底する説明課題は運動の原因論と目的合理性に絞られる傾向があるため、運動の行動そのものに焦点を当てて研究することはない⁽²⁾。これらの理由により、日本においては、社会運動論は経験的にも理論的にも質量ともに充実した研究の蓄積を行なってきたのに対して、群衆行動の社会学的研究はほとんどなされてこなかったという独特の研究状況（「集合行動研究の社会運動論傾斜」）が生じたのである。

また、これまで日本においてなされてきた数少ない群衆行動の研究は、「群衆行動研究の理論傾斜」の状況を呈している。すなわち、高度に思弁的な性格のものが散見される程度なのである。それらは、一方では社会理論にとっての群衆の意味を取り出そうとする群衆心理学、他方パークやブルーマーの集合行動論が群衆行動から社会運動までを一貫した枠組みで説明していることを、その理論の紹介によって主張しようとする集合行動論研究を指摘できる。そのどちらも、（それらに対する「理論的」評価はさておき）経験的事例にそくした知見や、経験的研究への指針の提出とは異なるレベルでの理論的研究である。もっとも、このような状況は、群衆行動の研究状況の側からみると、次のような要因に根ざしているともいえるだろう。一つには、日本においては、都市暴動や災害行動など群衆行動の研究においてよく取り上げられる事例が、アメリカなどに比べその数が少なく、また規模も小さいことが挙げられる。二つには、群衆行動研究一般が有する困難性が挙げられる。ほとんどの群衆行動の事例は、一般に短命で、予測し難く、同時多発的で大規模な現象であるために、十分な準備をもって観察したり、客観的データを十分に集めることが難しい。

けれども、社会学的な群衆行動の研究に限定しなければ、（農民一揆に関する数多くの研究を除外したとしても）例えば足尾暴動や米騒動に関するすぐれた歴史的研究が存在する[二村、一九八八；井上・渡辺編、一九五九—一九六二；藤野他、一九八八]。また社会学においても、中筋による日比谷焼き討ち事件や米騒動の研究[中筋、一九九二；一九九三]が、（民俗学的アプローチを用いてはいるものの）群衆行動の経験的研究として評価できる⁽³⁾。さらに筆者が研究を進めている大阪の釜ヶ崎、東京の山谷の両寄せ場地区での数十次に

⁽²⁾「紛争の動態の研究手法でもっとも有望ながらまだほとんど用いられていないものの一つは、物理的・社会的空間および時間の中で集合行動が普及するパターンを調査することである[Oberschall, 1978=一九八九:八八]。」

⁽³⁾さらにここに、中野 [一九六〇] による「ええじゃないか」の資料研究と、そこで示されているいくつかの興味深い知見を加えてもよいだろう。

わたる暴動の研究[吉田、一九九四]に関しては、ほとんど着手されたばかりである。したがって、これらを群衆行動研究の視角から捉え（読み直し）、そこから群衆行動に関する知見を取り出す余地は十分にある。このような意味で、日本における群衆行動の社会学的研究は、始まったばかりである。このような認識に立ったとき、今後の群衆行動研究にとってさしあたって必要なのは、群衆行動の理論的検討を通して経験的研究への指針を提出し、群衆行動の具体的知見の蓄積を促すことであろう。そのために、群衆行動の経験的研究を数多く蓄積してきたアメリカにおける近年の研究を参照し、それを検討することは有益であろう。

このような問題意識に立って、アメリカを主とした近年の群衆行動研究の流れを捉えるなら、それをミラー [Miller, 1985:10] に従って「連続性アプローチ (no real deference approach)」と呼ぶことができる。それは後述するように、一九六〇年代を転換点として、従来の議論の諸前提に対する根本的な批判を契機として提出された諸研究が、「ゆるやか」に共有する視角を指している。

ただ、「ゆるやか」であるということは、一面では相対的な経験的研究の多さに比べて、出された知見や説明モデル間の関連が見えにくい「百花斉放」の状態であることを意味している [ibid.:5]。だがこのような一見した多様性の中にも、群衆行動を捉える共通の視角は通底しており、それが「反抗の時代」を過ぎてなお、（単なる事例の豊富さや「時代」の実践的要請だけではない）独自の意義を群衆行動の経験的研究に与えているのである。だからといって、多様性を性急に統合することなど不可能であるし、またさしあたってその必要もない。重要なのは、連続性アプローチが経験的研究を生み出し続けているという事実である。そして、そのことは連続性アプローチに共通する視角が、「経験的な事例にアプローチする際に、どこを参照するかとか、どのように接近するかというような概括的な意味を与えるもの [Blumer, 1969=一九九一:一九二] 」という意味での「感受概念」としての特質を備えていることを示している。それだけに、日本における群衆行動研究の現状を鑑みたとき、このことはもっと注目されてしかるべきである。

したがって、本稿での中心的な問いは、連続性アプローチに共通する視角とは何かを明らかにすることとなる。そのためには、連続性アプローチを採る諸論者の議論を通覧し、そこから通底する傾向を取り出すのも一つの方法であるが、本稿ではそのような方法を採らない。かわりに本稿では、ターナーとキリアンによって提出された創発規範論とその理論的展開を取り上げる。なぜなら、彼らは群衆行動研究における経験的研究の重要性を最も早くから主張した論者であると同時に、創発規範論の理論的展開の過程は、連続性アプローチのエートスを構成する作業そのものだったと捉えることができるからである。しか

もそれは、彼らが提出した図式の適否よりも、批判の過程で出された数々の論点と、それらに対する彼らの対処の仕方にこそ表れているのである。そこで、本稿におけるより限定された問いは次のようになる。すなわち、①創発規範論に対する諸批判とそれらを経由した理論的展開はどのようなものであったのか、②それらから連続性アプローチに共通する視角として何が読みとれるのか、の二点である。以下、このような問いを念頭に置いて論述を進める。

1 連続性アプローチと創発規範論

群衆行動の研究は、「反抗の時代」と呼ばれた一九六〇年代アメリカにおいて、一つの転換点を迎える。当時大学院生として、また駆け出しの研究者として黒人暴動や、学生運動、さまざまな社会運動を経験（体験）した世代を中心に、従来の議論の前提に対する根本的な批判が行なわれるようになる[Fisher, 1972:188]。それは、例えば、都市暴動の発生因やそれへの参加要因について当時流布していた分析（説明）枠組みを「DFA 仮説」と名付け、これを統計的手法を用いて反証する試みを行なったマクファイル[McPhail, 1971]⁽⁴⁾をはじめ、従来の群衆行動についての個別の仮説を一つ一つ反証していく試みとして表れる。

同時に一九六〇年代末から群衆行動の個別の命題に関する経験的研究が数多くなされ、従来の議論の諸前提や理論的命題に代わるさまざまな方法的、理論的提案がなされていった。それが「連続性アプローチ」と呼ばれる一連の群衆行動研究である。例えば、ゲーム理論を導入したバーク [Berk, 1974] や、パニック研究をもとにした合意形成のコンピュータ・シミュレーションを行なうジョンソンとファインバーグ [Johnson & Feinberg, 1977; 1990]、またより最近では集合プロセス (assembling process) の研究を継続して行なってきたマクファイルが、パワーズのサイバネティック・モデルを導入して提唱している「知覚コントロール理論」 [McPhail, 1991]、さらに社会心理学の分野では、社会的アイデンティ

⁽⁴⁾「DFA 仮説」とは、人種間の差別的な機会の不平等や経済的格差などの何らかの剥奪状況 (Deprivation) が、マイノリティ集団に認知的な不満 (Frustration) を増大させ、それが何らかのきっかけを弾みに集合的な反抗 (Aggression) を生じさせると考える原因論である。こうした発想は、常識となじみやすいこともあって、当時の群衆行動論者の間でも多くの者が採用していた。マクファイルは、この仮説を前提とした暴動への個人の参加に焦点を絞った十本の報告を取り上げ、それらが暴動参加の説明に用いている独立変数の相関を検定した結果、それらのほとんどは棄却され、また相関が比較的高いグループについても、それぞれの知見の出された報告に特有の操作的バイアスから出された疑似相関である可能性が高いことを指摘した。

ティの発想を発展させた「自己カテゴリー化理論」の群衆行動への適用 [Reicher, 1984] などが挙げられるだろう。

ただ、連続性アプローチを採る論者それぞれの理論的立場や研究の具体的戦略、またその研究対象はさまざまであり、全体としてみた場合、個別の知見と仮説群の集合の観がある⁵⁾。しかもその名称によって彼らが自らの立場を自覚的にカテゴライズしているわけでもない。それは議論の出発点と、研究のめざすべき方向性に対する「ゆるやか」な共通性の点で、近年の研究の傾向を指す名称なのである。

その共通性とは、一つには彼らが自らの主張を提出する際に、手始めに攻撃する理論的立場についてのものである。彼らは、群衆行動を病理的で文化的・制度的文脈から外れたものと捉える立場からは一様に距離をとる。その意味で、連続性アプローチには、共通の（帰ってはならない）出発点に対するいわば「後ろ向きの合意」が存在する。しかもこの「合意」は、同時にもう一つの共通性、すなわち群衆行動と制度的行動との連続性への注目という研究がめざす方向性をも意味する。それは、マクファイルによる「DFA仮説」の反証にも見られるような、それまでの群衆行動論に混入していた常識的前提を経験的事例を主に用いながら反証していく作業を通して、群衆行動と制度的行動との連続性の確保をめざす研究方針である。

そして、このような研究方針を初めて、しかも極めて早い時期に示したのがターナーとキリアンによる創発規範論であった。

2 創発規範論—その一貫性—

ターナーが同僚のキリアンと共に『集合行動』を著したのは、一九五七年である。以来この本は、三〇年の間に二回の改訂を経ている。その中で、本書の中心的なパースペクティブである「創発規範論 (emergent norm approach)」は、そのときどきの研究の蓄積状況や、彼らの議論に対する批判を明示的、暗黙的に反映して、改訂を重ねる度に理論的展開を示した⁶⁾。その過程は、事例の付加や論述の補充といった単なる「増補 (enlargement)」とし

⁵⁾例えばマークスは、「連続性アプローチ」を採る論者が、集合行動は何であるのかに対する積極的定義を行っていないと批判する [Marx, 1980:260] が、おそらくこの点に関するコンセンサスの不在も大きな要因であろう。

⁶⁾ただ、「創発規範」という語が初めて用いられたのは、第一版が出版された後 [Turner, 1964a] においてであるが、同様の発想の萌芽は、第一版においても見受けられる [T&K, 1957:12]。また創発規範論の「改訂」過程は、最近ターナー自身が振り返っている [Turner, 1990:289-290]。

での改訂の過程というよりは、前版を踏襲しつつも、多くの事例や論述の差し替えを伴った「訂正 (rewriting)」としての「改訂」の過程といえる。したがって、三冊の『集合行動』は、それぞれ別個の本として扱うことさえ可能であるし、「改訂」が十全な意味での「改善」の過程であるならば、第三版のみを取り上げて検討を行なうことで充分であろう。

しかしながら、群衆行動の経験的研究にとっての何らかの指針を取り出そうとする本稿の目的にとっては、彼らの議論の一貫性と訂正の関係とその意味を取り出すことが重要である。なぜなら、彼らの改訂の過程は、連続性アプローチを採る諸論者の研究成果や批判との相互作用を経由しているからであり、その過程はそのまま連続性アプローチの方法論的指針を指し示しているからである。

そこでまず本節では、彼らの議論の一貫性を示すことによって創発規範論の全体像の描出を試みる。創発規範論の一貫性は、群衆行動を次の三つの局面(phase) から捉えようとする点にある。それは、①多様な表出、②状況の定義過程、③創発規範、の三つである。

① 多様な表出 (differential expression)

ターナーとキリアンは、自らの立場を提出するに当たって、それまでの群衆行動に対する説明スタイルを、「非常に顕出的で、常軌を逸した身体行動が、一カ所に集まっている人々の間に急速に広ま [T&K, 1972:12]」った結果として説明するスタイルを共有する「感染論 (contagion theory)」と、「ある刺激が、多くの人々が潜在傾向として共有している、あらかじめ存在している本能を解放 [ibid.:14]」った結果として説明するスタイルを共有する「収斂論 (convergence theory)」として特徴づける。

こうした見方に対して、彼らは群衆内での諸個人の多様な表出を強調する。例えば、秘儀的な宗教集会における宗教的沸騰状態の中でも、そこに居合わせた者全員が同じように感じて、同じように行動するわけではないし [T&K, 1972:16-18; 1987:23-25]、密閉された空間での非常事態において、その場にいた者全員が集合的逃走 (panic) 状態に陥るわけではないのである [T&K, 1987:82-83]。彼らによれば、感染論も収斂論も、結果的に群衆行動を非合理的、病理的など、それぞれの論者が想定する因襲的規範や文化、社会構造から非連続的なものとして捉え、常識的な群衆行動観を再生産することに寄与してきただけということになる⁷⁾。

そして、このような（実際に観察すれば直ちに分かる）事実を理論から排除する感染論や収斂論に共通する前提を、彼らは「全員一致の幻想 (illusion of unanimity)」と呼んで退ける。つまり、そのどちらもが、群衆をそのもっとも顕在的な特徴を全員が共有する集合体として捉えているというわけである [T&K, 1972:21]。

逆に、多様な表出から出発するとき、観察者または参加者によって顕在的であると知覚される全員一致は、多様な表出がある程度パターン化された程度のものに過ぎないことになる。群衆行動の説明は、このパターン化がどのようにして生じるのかを説明することを目的とすべきなのである [ibid.:22]。そして彼らは、この群衆における多様な表出のパターン化のプロトタイプを、社会心理学におけるシェリフらの有名な「自動運動実験 (autokinetic experiments)」に求める [T&K, 1972:35]⁽⁸⁾。

群衆行動も、自動運動実験がコントロールされた環境のもとで人工的に創り出したのと同じように、因習的な制度的規範や日常的な社会関係が適切に機能しなかったり、失われていたりする「非制度的状況」の下で生じると考える彼らは、自動運動実験において見られた「斉一性への圧力」と同じような種類の、何らかの規範が、適切な状況の定義を求めようとする諸個人の相互作用から生み出されると考えた。それを彼らは「創発規範」と名付けたのであった。では、群衆内で創発規範を生み出すような相互作用とは、どのような種類の相互作用なのであろうか。

② 状況の定義過程

それまで、群衆内における相互作用の説明としては、ブルーマーによる「ミリング」が有名であった。それは「循環的相互作用」を通した、「非シンボリック的相互作用」であると見做されてきた [Blumer, 1936; 1938]。

これに対して彼らは、群衆に特徴的な相互作用過程としてシブタニ的な意味での流言を取り上げる。いうまでもなく、シブタニは流言を、曖昧な状況下において意味のある解釈

⁽⁷⁾ 感染論、収斂論の問題点として彼らが指摘するのは、次のような諸点である。1) 極端な事例から過度な一般化をしている。2) 人間は剥がすことのできる文化的仮面を付けた獣に過ぎないという疑わしい概念を普遍化している。3) 経験的支持が得られない。4) 群衆行動/社会運動の転化を説明できない。5) 組織化を説明できない。6) 反応の自動性を前提としている。7) 個人に対する集団の作用を過小評価している。

⁽⁸⁾ この発想を群衆行動の説明に持ち込むことを提案したのは、最初の赴任地であるオクラホマ大学でシェリフと知り合ったキリアンによってである [Turner, 1990:289]。なお、「自動運動実験」の概要を、一般的な心理学の教科書からの以下の引用によって示しておく。

「被験者19人が暗室に1人で入り、自動運動現象（暗黒の中で固定した1つの小さな光点を凝視していると、その光点が揺れ動いて見える現象）による光点の移動距離を判断（100回）した場合は大きな個人差があった。別の実験では、2人と3人の集団を各8個つくり、はじめは個人で判断作業を行い（1セッション）、次に集団状況（他人の判断が聞える）で行う（3セッション）4集団と、集団状況からはじめる4集団にそれぞれ分けた（各セッションとも判断は100回）。その結果、前者では個人差が小さくなり一定の値に収斂し、後者では個人場面になっても集団状況の収斂地を維持させる傾向が見られた [足立、塩見（編）、一九八五：二六三]。」

を求めようとする集合的問題解決行動の一形態であると捉えた⁽⁹⁾。群衆行動は「因習的な規範的構造が当面の状況に対して内在的葛藤を来しているか、または適用不可能」[Turner, 1964b:132]な非制度的状況下で生じる。けれども、そのような状況下においても、人々は感染論が主張するように、他者の暗示に全人格的にコミット（模倣）したりはせず、また収斂論が主張するように通常は社会化の下に包み隠している「本性」を発現させるわけでもなく、ある意味で喪失した状況の定義に変わるその場にふさわしい状況の定義をつくりあげるのである。そしてそのときに最も重要な相互作用の形態が流言である⁽¹⁰⁾。

このような相互作用を通して、非制度的な状況における群衆内の人々は、その中で自分が適切に行動するための状況の定義を探り合いながら、同時に共働してその場にふさわしい状況の定義を創り上げる。彼らは、概ね群衆内での相互作用を、このようなイメージで捉える。

③ 創発規範

非制度的な状況下における状況の定義過程の中から、参加者にとっても観察者にとっても支配的と判断される集合的な状況の定義が生じる。彼らはそれを「主音決定 (keynoting)⁽¹¹⁾」と呼ぶ。多様な表出と表現される群衆内で、さまざまな動機に基づいて諸個人が相互作用（流言）を行なう中から、特定のシンボルや対象が状況の定義の主音 (keynote) として選ばれ、群衆の行動に規範的な作用をもたらす。主音は、ある対象や特定の人物、かけ声をシンボルとして指し示すこと (symbolization) によって、状況の曖昧さを、その意味にしたがって解消 (resolve) し、その意味づけに同調できない者に沈黙やその状況からの撤退を強要する集合的圧力を感じさせる [T&K, 1972:47-56]。すなわち、いったん主音となった状況の定義は、ある意味で規範的な働きを及ぼすのである。それを彼らは創発規範と呼ぶ

⁽⁹⁾「流言とは、異常事態に遭遇した人々がその事態に対し行為の方向を決定するために自分たちの知識を集めるときに出現するコミュニケーションのパターンである [Shibutani, 1966—一九八五:二二]」

⁽¹⁰⁾彼らは群衆内での相互作用を、言語的なコミュニケーションとしての流言に限定してはいない。身体的な相互作用であるミリングも、流言に付随するプロセスとして捉えている。ただ、感染論がミリングを動物の群れとの比喩で用いるのとは異なり、彼らはそれを、曖昧な状況下での認知的情報探索プロセスの一部として捉えるのである [T&K, 1972:37-38]。

⁽¹¹⁾「鍵への注目」とする訳も見られるが [ターナー、一九九五:二三七]、彼らの用法は明らかに keynot-ing であり key-noting ではない。彼らは（決して明示しているわけではないが）、多様な和音を含みつつも、全体の調性 (key) を決定する音階の「主音 (keynote)」という音楽の比喩で、多様な表出と創発規範の関係を表そうとしていたはずである。その意図（イメージ）を汲んで、ここでは「主音決定」と訳した。

(12) 創発規範は、制度的状況下で行動を規制する制度的規範と、時には重なることはあっても、その指示する内容が、基本的には群衆行動が生じる非制度的状況下においてその場だけの状況の定義に付随するという意味で、相対的に異なるものとして概念化される。それは、以下のような特徴を有している [T&K, 1972:23-25]。群衆内で多様な表出を行なう個人の不一致の抑制。静かな状態にも興奮した状態にも、メンバー間の感情の誘発に先立って表れる。メンバーの行為に正当性を供給する。群衆の感情と行為の無制限な発達を限界づける。個人の識別可能性や、集団に対するアイデンティティの認知は、規範の下でのコントロールのされ易さを引き出す。

まとめると、創発規範論が描いた群衆行動のプロセスとは、非制度的状況下で、多様な表出を行なう多様な諸個人が、その状況に適切な定義を言語的、身体的なミリングの過程を通して再構成しようとする試行の中から創発規範が生まれることによって、集合的な状況の定義が現れ、それがその状況において適切な振る舞いに関する規範的作用を及ぼすことによって、群衆行動は生じるのである。それは群衆行動を感情的で非合理的と見なす従来の群衆行動観に代わって、伝統的な社会学的概念である規範概念を用いることによって、群衆行動を制度的行動と同一の地平において分析することを提唱した点において、間違いなく今日の連続性アプローチの嚆矢であったといえる。

3 創発規範論をめぐる諸議論と通底する問題点

連続性アプローチを採る論者は、創発規範論の感染論、収斂論批判には概ね同意する⁽¹³⁾が、それが提出した理論的アプローチ（特に『集合行動』の第二版 [1972] 以前における彼らの議論）についてはさまざまな批判を表明している。ここではそれらについて紹介することを通して、創発規範論の理論的問題点の本質的要素を指摘する。

① 動機による説明の恣意性

この手の批判は、多様な表出から主音としての状況の定義が決定される過程の説明に対

(12) 「そのような状況においては、新たな規範が生じ、それに従った集合行動への方向性を与えるだろう。このような諸規範は、共有された状況の定義を供給することによって、諸個人の行為の共働 (coordination) を可能にするのである [T&K, 1972:30]。」

(13) 例えば、マクファイルは群衆行動の研究史を常識的偏見 (myth) からの解放の過程として捉え、創発規範論以前の説明スタイルを「変容説 (transformation explanation)」「先有傾向説 (predisposition explanation)」と呼んでいる [McPhail, 1991] が、これらはそれぞれ「感染論」「収斂論」と全く同義である。

して不満を表明する。

ライカーは、創発規範の発生を説明する際に用いられている「主音決定」という考え方に含まれる論理的循環を指摘している。ターナーとキリアンは、群集内の参加者を、動機に従って五種類に分類する。それらは、すぐさま行為を要求するものとして状況を定義しようとする者 (committed)、行為するかどうかは集団の規範に沿うつもりの方 (concerned)、状況に関わらず集合行動に参加すること自体から満足を得る者、好奇心のみでその場の成りゆきを見守る者 (spectator)、他者を自己の目的達成の道具として見てその状況から利得を得ようとする者 (exploiter) とされる [T&K, 1972:27-29]。ライカーが批判するのは、こうした動機による参加者の分類と、これらの参加者のうち、主音決定を通じた支配的な状況の定義に与るのは、利用者 (exploiter) であると考えられるような議論を行なっている⁽¹⁴⁾点である。創発規範論は、多様な表出を行なう参加者の相互作用を通して群集行動が生じることを強調しておきながら、ある動機を有する「支配的な少数者 (a dominant few)」によって規範の発生を説明する余地を残してしまった。これは彼らが批判した議論 (収斂論、感染論) への逆戻りを意味し、その点で創発規範論は、畢竟「オールポートの個人主義のエリート版」に過ぎないのである [Reicher, 1984:3-4]。

同様に、マクファイルも、動機による参加者の分類が観察される行動と同語反復的であると批判する [McPhail, 1991:91]。例えば、群集内のある者が発したかけ声が、群集全体の攻撃目標を決定した場合、その個人の「動機」は、群集を動員してその対象へと攻撃をふり向けることによって何らかの利得を得ようとした利用者のそれであることになる。したがって、群集に支配的な状況の定義は利用者によって決定されやすい。このような循環的推論に陥るのである。

② ミクロ／マクロ間の断絶

リーは、創発規範論が個々人の多様性から創発規範が自然発生的に生じるかのように説明しており、その間をつなげる理論的説明が欠如しているという。創発規範論は、個々人の多様性からの出発という個人主義的方法論を基盤としながら、「支配的な状況の定義」あるいは創発規範という集合レベルの概念を「一番最後に」付け足すことによってのみ、個人行為の個別性と集合主義を調停し得ているというのである [Lee, 1990:218]⁽¹⁵⁾。「自然発生的」とは、何の外在的理由もなしに、参加者の認知状態のみから群集行動が発生する

⁽¹⁴⁾「彼らは… (略) …逸脱行動の雛形を広めることによって集合行動の促進エージェントになりえる [T&K, 1972:29]。」

⁽¹⁵⁾彼は『集合行動論』第二版 (1972) のみを取り上げている。

という発想 [Miller, 1985:31] と同じであり、これは収斂論と同じロジックである。

③ 対象定義の反証不可能性

ティアニーは、創発規範論を科学理論としての「反証可能性」という観点から捉えたとき、その対象定義において既に問題が見られるという。ターナーは、集合行動を「創発的な規範的定義の下に生じたり変化したりする行為の共働のプロセス [Turner, 1964b:132]」と述べている。しかし、この定義からすると、もし状況適合的な規範が何ら生じない群衆行動があったとしても、それは定義上集合行動ではないことになる。したがって、創発規範論は決して誤りを証明できぬ性格のものとなっており、その原因は、実証的に検証されるべき仮説を対象定義の段階で紛れ込ませてしまったために生じた論理循環にあるというのである [Tierney, 1980:48]。

④ 創発規範概念の曖昧さ

創発規範概念そのものの曖昧さは、創発規範論について論じる際に最も多く指摘されてきた問題点である [Neal & Phillips, 1988:234]。それらは例えば、創発規範論の依拠する文献が、穏健な見解に対する合意を示唆するものばかりで、暴力行為の発生するような極端な見解への合意 (risky shift) をどのように創り出すかを説明するのに不十分であるとする批判 [Pery & Pugh, 1978=一九八三:五三]。創発規範論の想定する規範は具体的・行動的・直接的・視覚的であって、法などの制度的規範が有する非直接的・媒介的で概念化や命題の形での分離が可能な性格を持っておらず、したがって規範という概念で捉えるのはおかしいとする意見 [Marx & Wood, 1975:367]。あるいは、創発規範と制度的規範とがどのような意味合いにおいて異なるのかについてほとんど論じられていないことに対する不満 [Neal & Phillips, 1988:234]⁽¹⁶⁾等である。確かにこうした点について、これまでのターナーとキリアンによる説明は曖昧であった⁽¹⁷⁾し、創発規範の経験的事例から特定化は一度もなされていないのである。

通底する問題—「対称性」の欠如—

これら四点にわたる諸批判のうち、①から③までは、どれも創発規範論の論理的循環性や自己矛盾に関わる批判としてまとめることができるだろう。そして④の創発規範概念の曖昧さが、その他の全ての批判を引き起こすという構造になっていることもわかる。すな

⁽¹⁶⁾ここでの彼らの批判の対象は、第二版 [1972] である。

⁽¹⁷⁾それらは例えば、制度化された規範はサンクションとサンクションを発動するための確立された手続きを有するが、創発規範にはサンクションしかない [T&K, 1957:12]、創発規範は現前の場面においてふさわしいと定義されたものである [T&K, 1972:29]、創発規範は制度的規範と程度・質において違う [ibid.:32] 等である。

わち、創発規範概念が曖昧で適切に概念化されていないということが、恣意的な動機論や、素朴な自然発生観や、対象定義の不適切さへの諸批判につながっていると考えられるのである。

それでは、この創発規範概念の曖昧さは、そもそも彼らの理論化におけるどのような原因に根ざしているのか。それは、科学社会学者のブルアがいう「対称性 (symmetry)」の原則 [Bloor, 1976=一九八五:七] と密接に関わる。

ブルアは、科学知識についての知識社会学を展開する中で、デュルケームやマンハイム、ズナニエツキらにみられる「もっとも楽観的で科学主義的な諸傾向を融合」させ、それを因果性、不偏性、対称性、反射性の四つの原則からなる「ストロング・プログラム」にまとめる。これは「合理性」や「論理」といった超審級的判断基準によって、科学の「内的歴史」が押し進められると考える通常の科学観に対抗して、数学や論理学さえもその射程に入れた「知識」の徹底した因果論的説明をめざして採られた説明戦略である。この中で最も骨子となる原則は「対称性」であり、それは「同じ型の原因で、例えば、正しい信念と間違った信念が説明される [ibid.]」こととされる。通常の科学観にしたがえば、ある知識が誤っていた場合、それは（場合によれば）心理的・社会的な科学外的基準によって説明されうる事象であるのに対し、知識の正しさは科学の内的論理によって自動的に生み出された結果として説明の必要がないものとされる。このような科学的知識の目的論的説明を受け入れている限り、科学社会学はいつまでたっても「誤謬の歴史学」にすぎず、知識そのものの因果論的説明を不完全にしかし得ないことになる。そこでブルアは、正しいとされている知識の社会的規定因をも、知識が誤っていると判断された場合と同じ資格で扱うことを主張したのである。

このようなブルアの説明戦略の中で対称性の原理が持つ意義は、真／偽に関わる知識だけでなく、道徳的な価値判断を伴う領域を社会学的に扱う場合にもあてはめることができる。例えば、逸脱行動を社会解体によって説明する場合を思い起こせば、その説明図式は、道徳的に望ましくないと判断された行動を、そのような場合に限り、道徳的に見て病理的と判断された状態によって目的論的に説明するという非対称性を示していることがわかる。逸脱行動の説明は、そこに相互作用や社会化など、制度的行動の説明にも用いられる何らかのメカニズムを導入しなければ、説得的な議論をすることができないのである。

そして創発規範論が、（逸脱的で自然発生的と判断されがちな）群衆行動の説明において受けた批判は、まさにこの点に根本的な原因がある。すなわち、創発規範の曖昧さという批判を対称性の原則に関わらせたならば、創発規範という概念は、群衆行動の見た目の自然発生性を自然発生的な要因で説明する「非対称的な目的論的概念」[ibid.:一六] となっ

ているのである。先にみたマークスとウッズの指摘は、この点を直接に衝いている。すなわち、ターナーとキリアンの論議から読みとれる創発規範は、制度的規範とは異なったレベルで論じられており（対称性の欠如）、ただ彼らは「規範」という概念のカテゴリーだけで、群衆行動と制度的行動との連続性が確保しようとしていることが、創発規範論の最大の問題点なのであり、諸批判に通底する本質的要素なのである。

4 創発規範論の「改訂」が意味するもの

『集合行動』第三版[1987]では、このような諸批判を受けて、かなりの「改訂」がなされている。だがここではそうした変更点の全てについて比較検討するかわりに、対称性にもっとも直接的に関わる変更点のみに注目する。それは、創発規範を「創発的な（捉え直された）状況の定義（an emergent(revised) definition of the situation）」とする変更である。

ターナーとキリアンは、創発規範論に対して提出された上記の諸批判を反映して、創発規範は「創発的な（捉え直された）状況の定義」、あるいは「支配的な状況の定義（a dominant definition of the situation）」であると定義しなおす[ibid.:33]。すなわち、流言や身体的ミリングによる集合的な状況の定義の試みを通して、もともとあった状況の定義の雛形が組み替えられ、ある状況の定義が支配的となったとき、それに付随するのが創発規範であるというのである[ibid.:8]。この変更は一見些細なものに思われるし、彼ら自身もこの変更の意味についてそれ以上にまとまった議論をしていないが、創発規範論への諸批判に対して彼らの立場を明確化する重要な概念的捉え直しとして評価できる。

まず、創発規範を状況の定義と同一視するようになったことは、彼らが創発規範を、実体概念としてではなく機能概念として明確に位置づけるようになったことを意味する。ここから創発規範とは、状況の定義が必然的に伴う規範的作用なのであって、命題の形で取り出す必要はないことが明確になる。よって彼らが創発規範を経験的に取り出す作業をしていないのも当然であった。だが、一方で彼らは何らかの実体的で特別な規範が生み出されるかのような説明もしている⁽¹⁸⁾。したがって、創発規範が曖昧で取り出せないという批判を受けたのもある意味で当然であった。すなわち、規範のレベルで群衆行動と制度的行動の連続性を主張した彼らは、経験的に確かめようのない実体化された規範を群衆行動の説明に用いることによって、単に「概念のカテゴリー」における連続性を確保したに過ぎなかった。その結果、制度的行動を制度的規範で、群衆行動を創発規範で説明するかのよ

⁽¹⁸⁾例えばそれは、集合行動定義における表現に表れている。

うな「非対称性」を批判されることになったのである。

次に、「創発的」という語に「捉え直された」という語が括弧付きで付加されたことは、「創発性 (emergence)」に対する重要な発想の転換を求めている。

「創発性」という考えは、パークとバージェス以来、ブルーマー、ターナーとキリアンへと至るシカゴ学派直系の「集合行動論者 (collective behaviorists)」に共通する要素の一つである [Snow & Davis, 1995:195]。キリアンは社会運動を含む集合行動の分野において、「自然発生性 (spontaneity)」と「創発性 (emergence)」、あるいは「自然発生的 (spontaneous)」、「創発的 (emergent)」という概念が重要な役割を果たしてきたと指摘する [Killian, 1984:779]。このうち「自然発生的」という用語は、先に述べたように原初的集合行動についてブルーマーが、「自然発生的に生じ、あらかじめ決められた理解や伝統によらない [Blumer, 1939:222]」と表現したときに端を発するという。例えばブルーマーは、集合行動論の目的を、「一つの新たな社会秩序がどのようにして成立するかを理解しようとする」(下線筆者) ことにあると述べている [ibid.:223]。また彼は、群衆行動から社会運動に至る集合行動の諸類型を初めて包括的に論じたことでも知られるが、その中で原初的 (elementary) な集合行動を「自然発生的」なものと捉えている⁽¹⁹⁾。そしてそれは、「新たな集合行動と新たな社会生活の形の発達に関して重要な役割を演じる [ibid.:253-254]」主体として捉える。つまりブルーマーは、群衆行動(彼の言葉では原初的な集合行動)が、集合プロセスと秩序形成の両面において、「新規性」によって特徴づけられる現象であることを示しているのである。したがって、(少なくとも初期の)ブルーマーの集合行動論において、群衆行動の「自然発生性」には「新規性」という意味内容が盛り込まれていた。

ターナーとキリアンは、このような自然発生的な捉え方に対しては一貫して批判的であった⁽²⁰⁾のだが、次のようにも述べている。「パニックやモップなどの極端な形態は、集合行動の純粹形と考えられるが、流行や景気変動や組織における志気や組織間の力関係などの場合によっては制度的と見られる現象に含まれる集合行動も捉える必要がある [Turner, 1964a:383]」(下線筆者)。また、創発規範による説明を「集合行動固有のプロセス [ibid.]」とも述べている。これらを合わせて考えると、創発規範を発生させるプロセスは、極端な形態の「集合行動の純粹形」に固有のプロセスだということである。したがって、これは、原初的な集合行動に特有の相互作用を「循環的反応」とした初期のブルーマー

⁽¹⁹⁾「自然発生的に (spontaneously) 生じ、あらかじめ決められた理解や伝統によらない [Blumer, 1939:222]。』

⁽²⁰⁾少なくとも『集合行動』第一版 [1957] 以降はこのような立場を貫いており、それが第二版での最大の変更点であるといえる [Turner, 1964a, 383]。

の説明と同じである。このように、一面では彼らも群衆行動を「自然発生性」において捉えていることがわかるのである。

けれども、状況の定義は、社会化のプロセスを通して獲得された何らかの解釈枠組みなしにはあり得ない。つまり「無」から突然生じるものではない。それは、われわれの知識の一部であって、何らかの既存の時間的・空間的参照点とのつながりなしにはあり得ないのである [McHugh, 1968: 23-32]。この点に関して、キリアンは、「創発 (emergence) には再組織化 (reorganization) が含まれていて、再組織化すると今までになかった何かがもたらされる [Mead, 1934=一九七三: 二一]」と述べたミードを引きつつ、「創発性」は「新規性」ではあるのだが、それは以前には存在しなかった「再配置 (reorganization)」という意味での「新規性」であると明言する⁽²¹⁾。このような考え方は、「連携的な行為 (joint action)」についての後期ブルーマーの見解とも一致する。彼は次のように述べる。

「新しいものであれ、長く確立されたものであれ、全ての連携的な行為は、参加者の、それに先行する行為という背景の中から、必然的に生まれてきたものであるということだ。このような背景を離れて、新しい種類の連携的な行為が出現することは絶対にない。… (略) …もし、何らかの連携的な行為形態を、以前に行なわれていたものごとから発達してきたものとは考えず、その構成や性質が自然発生的 (spontaneous) に無から発生してきたものであるかのように、歴史的な結びつきから切り離すことができると考えるなら、それは、足元をすくわれやすい、経験的には不適切な立場に立つことである。 [Blumer, 1969=一九九一: 二五-二六]」 (下線筆者)

したがって、創発規範を状況の定義と見なすことは、必然的に「創発性」を「再配置」、すなわち「捉え直し (revision)」と見なすことを意味するのであり、その「再配置」の新しさは、「分節化され連結されている個々の行為 (要素) とは別個に、その分節化または連結の内に存在するような性質 [ibid.: 二一]」 (括弧内筆者) のことなのである。

以上をまとめると、創発規範を「捉え直された状況の定義」と見なすことは、社会的・文化的・時-空間的参照点の再配置が群衆におよぼす規範的作用が、群衆行動をコントロールすると捉えることを意味する。つまり多様な参加者の多様な参照点の再配置の結果、創発的な規範性を有する状況の定義がその場で流通するのである。そして、そのような再配置のされ方を説明することが連続性アプローチとしての創発規範論の主要関心なのである。

⁽²¹⁾ 「『創発性』は、過去との不連続を意味するのではない。それは連続性を補うものであって、観察者が、以前に過ぎ去ったものの内にある原因を無視することなく新しいものを捉えるようにさせるのである [Killian, 1984: 780]。 」

したがって、創発規範論の「改訂」をこのように解釈するならば、それは群衆行動の経験的研究に際しての「感受概念」化に大きく寄与することになる⁽²²⁾。すなわち、群衆行動の場面で働く規範的作用に注目して、それが可能となった状況の定義が、さまざまな参照点のどのような再配置の結果生じたのかを遡及的に解釈し、そこに働いている相互作用のメカニズムを明らかにするのである。

創発規範論をこのように捉え直すことは、規範ではなく「状況の定義」という、より操作化しやすい概念を焦点に据えることによって、群衆行動の経験的研究への道を開くと同時に、中心概念の対称性を確保することも意味する。この意味で、ターナーとキリアンが、「静かな状態にも興奮した状態にも適用可能である[Turner, 1964a :390-392; 1964b :132; T&K, 1972:22-25]」と述べたのは、実体化された創発規範の働きのことではなく、＜制度化／創発化（＝制度的なものの組み替え）＞という相対的な軸上に位置づけられる状況の定義のことであった。そしてそれは「創発性」を「再配置」と捉える視点の転換によって可能となるのである。

5 「改訂」された創発規範論と連続性アプローチ

ターナーとキリアンがとりわけ強調したのは、集合行動を制度的行動との連続性において捉えるという点であった。この点において創発規範論は連続性アプローチと理論的目標を共有する。実際この点のみにおいて今日の連続性アプローチは特徴づけることができる。だが、実体概念としての創発規範は、そのための戦略としては対称性を欠き、ただ概念のカテゴリーのみでの連続性を確保したに過ぎなかった。

それに対して、創発規範論の「改訂」が示していたことは、確保すべき連続性は、ただ「概念のカテゴリー」だけでなく、「対称性」における連続性でなければならないということであった。もしこのこと（群衆行動の中心的説明概念における対称性の確保）が、創発規範論の理論的問題点の多くをクリアし、このアプローチを「感受概念」とすることができれば、それは同時に連続性アプローチが共有する視角の核心を指し示していることだろう。実際、かつてターナー自身が行なった経験的研究や、近年の連続性アプローチによる群衆行動の事例研究並びに理論的アプローチは、この点を支持しているように思われる。最後に、ターナーによる事例研究を紹介することによって、このことを示しておく。

⁽²²⁾マクファイルも、「捉え直された状況の定義」への変更によって、やっと創発規範論が経験的研究への道を開いたと評価している [McPhail, 1991:99]。

ターナーとサーラスは、一九四三年にロスサンゼルスで生じた「ズート・スーツ暴動 (zoot-suit riot)」に関する新聞報道の内容分析を行なった [Turner & Surace, 1956]。これは長いスーツと裾で絞り込んだだぶだぶのズボン、べったりとグリースをぬった長髪を特徴とする「ズーター (zooter)」と呼ばれるメキシコ移民系のギャングに対する海軍水兵およびそれを支持する白人コミュニティの集中的な暴力事件である。ターナーとサーラスは、暴動以前の十年間にわたって地元新聞の見出しの内容分析を行なったところ、暴動を準備する数年前から、それまでの好意的、批判的入り交じった見出しが消え、かわりに「ズーター」をシンボルとする見出しが急激に増加することを見いだした。ここから彼らは、「メキシコ人 (Mexican)」という好意的・批判的入り交じった両義的シンボルが、「ズーター」という新たなシンボルが顕在化することによってその両義性を中和化され、彼らに対する意味付与が否定的な方向へと収束することによって暴動が準備された」と結論づける。彼らの分析では、メディアとの相互作用を通じた、両義性を有した日常の意味付与の否定的な方向への収束という「再配置」が指摘されている⁽²³⁾。

おわりに

連続性アプローチが確保すべき連続性は、単なる概念のカテゴリー上の連続性ではなく、ブルアのいう「対称性」における連続性でなければならない。そのための戦略としてターナーとキリアンが行き着いたのが、捉え直された状況の定義であった。とりわけ群衆行動の研究においては、対称性の確保は、群衆行動を制度的行動の再配置の結果として捉えることを意味する。そうすることが、創発規範論はもちろんのこと連続性アプローチを「感受概念」とし、経験的研究への道を開くのである。このような理論的展開過程は、彼らがそのときどきの研究成果や批判との対話を（間接的なながらも）行なった結果でもある。このことは、群衆行動研究におけるクリティカル・マス⁽²⁴⁾の存在の重要性を示してもいるだろう。

とはいえ、これで創発規範論をめぐる問題が全て解決したわけでは全くない。本稿で示した彼らの理論的展開過程は、あくまで群衆行動の経験的研究のための指針を提出するという限定的な目的からみた、ありうる一つの解釈にすぎない。したがって、必ずしも彼ら

⁽²³⁾ 日本における釜ヶ崎第一次暴動 (1961) に対する同様の分析は、吉田 [1994] を参照。

⁽²⁴⁾ 「相互に参照し合うグループとなって、互いの関心を維持し合うに十分なだけの数の人々 [Lazarsfeld, 1962:761]。」

自身が本稿で示した解釈と同じ意図を持って改訂を行なったという保証はない。例えば、創発性規範は、彼らの提出する図式 [T&K,1987:11] においては、依然として状況の定義とは独立した実体的概念として扱われているようにとれるし、また、創発規範論の理論としての完成度の点でも、まだまだ大いに疑問の余地がある⁽²⁵⁾。さらに、創発規範を状況の定義と同値と見なすことは、それでは創発規範論は状況の定義論の一亜種にすぎなくなるのではないかというティアニーの指摘 [Tierney,1980:50-51] をまともに被ることになる。この点に関して群衆行動が「時代遅れの概念 (outmoded concept)」ではなく、そこに独自の知見を求めるとするならば、何よりも実際の経験的研究の蓄積が必要なのであるが、彼らは改訂版の創発規範論に基づく経験的研究を行っていない。

それでも、創発規範論の理論的展開過程の検討を通して抽出した、対称性における連続性は、連続性アプローチのエートスであり、その経験的研究の重要な指針であることは間違いないだろう。したがって、上記のような問題点も、この地点をしっかりと守った上で乗り越える余地はまだまだある。しかも群衆行動研究が、創発化／制度化の対称性を確保することは、このアプローチやそこから出される知見が、群衆行動だけでなく、社会運動論や社会制御論、規範論、社会理論といった他の領域にも用いることができることを意味する。すなわち、さまざまな社会現象を群衆行動として分析できる道をも開くだろう。その意味で、連続性アプローチによる群衆行動研究は、「対象規定的研究分野 (problem defined field)」であるだけでなく、「理論規定的研究分野 (subject matter field)」でもあるのである⁽²⁶⁾。

参考文献

- 足立明久、塩見邦雄（編）、一九八五、『事例で学ぶ心理学—理論とその応用—』勁草書房。
 Berk,Richard.,1974,*Collective Behavior*,Dubuque,Iowa:Wm.C.Brown.
 Bloor,David C.,1976,*Knowledge and Social Imagery*,Routledge & Kegan Paul.=佐々木力、古川安（訳）
 『数学の社会学—知識と社会表象—』培風館、一九八五。

⁽²⁵⁾マクファイルは、創発規範論を紹介する際に、彼らの論議と図式の間の「非連続性」に対して苦言を漏らしている。「それは、彼らによる集合行動の説明を理解する助けになるというよりは、より混乱させるものに思われる。さらに、その図は、ターナーとキリアンによる初期の理論図式の内容を、私が一九八七年版において見いだしうるよりもはるかに根本的に変更していることを窺わせるのである [McPhail, 1991:104]。』

⁽²⁶⁾ターナーは、災害研究を類型論から始めることを批判する中で、社会学の研究分野を、研究対象や事例が理論に先行する分野（対称規定的研究分野）と、逆に理論や問題意識が研究対象に先行する分野（理論規定的研究分野）とに相対的に区別する [Turner,1989]。

- Blumer, Herbert., 1936, "Social Attitudes and Non-Symbolic Interaction." *Journal of Educational Sociology*, Vol.9, pp.515-523.
- , 1939, "Collective Behavior.", in R.E.Park(ed), *An Outline of the Principales of Sociology*, NY: Barnes & Noble, pp.221-280.
- , 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, New Jersey: Prentice-Hall. = 後藤将之 (訳) 『シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法』 勁草書房、一九九一。
- Fisher, Charles S., 1972, "Observing a Crowd: The Structure and Description of Protest Demonstrations.", in Jack D. Douglas (ed), *Research on Deviance*, NY: Random House, pp.187-211.
- Huber, Joan., 1973, "Symbolic Interaction as a Pragmatic Perspective: The Bias of Emergent Theory." *A.S.R.*, Vol.38, pp.274-284.
- 藤野豊 (他著)、一九八八、『米騒動と非差別部落』 雄山閣出版。
- 井上清、渡辺徹 (編)、一九五九-一九六二、『米騒動の研究』 有斐閣。
- Johnson, Norris R. & William E. Feinberg, 1977, "A Computer Simulation of the Emergence of Consensus in Crows." *A.S.R.*, Vol.42, pp.505-521.
- , 1990, "Ambiguity and Crowds: Results from a Computer Simulation Model." *Reserch in Social Movements, Conflict and Change*, Vol.12, pp.35-66.
- Killian, Lewis., 1984, "Organization, Rationality and Spontaneity in the Civil Right Movement." *A.S.R.*, Vol.49, pp.770-783.
- Lazarsfeld, Paul., 1962, "The Sociology of Empirical Social Research." *A.S.R.*, Vol.27, pp.757-767.
- Lee, Raymond L.M., 1990, "The Micro-Macro Problem in Collective Behavior: Reconciling Agency and Structure." *Journal for the Theory of Social Behavior*, Vol.20, pp.213-233.
- Marx, Gary T., 1980, "Conceptual Problems in the Field of Collective Behavior.", in H.M. Blalock, Jr. (ed), *Sociological Theory and Research: A Critical Appraisal*, NY: The Free Press, pp.258-274.
- Marx, Gary T. & James L. Wood, 1975, "Strands of Theory and Research in Collective Behavior." *Annual Review of Sociology*, Vol.1, pp.363-428.
- McHugh, Peter., 1968, *Defining the Situation: The Organization of Meaning in Social Interaction*, The Bobbs-Merril Company.
- McPhail, Clark., 1971, "Civil Disorder Participation: A Critical Examination of Recent Research." *A.S.R.*, Vol.36, pp.1058-1073.
- , 1991, *The Myth of the Madding Crowd*, NY: Aldine de Gruyter.
- Mead, George H., 1934, *Mind Self and Society*, C.W. Morris (ed), University of Chicago Press. = 稲葉三千男 (他訳) 『精神・自我・社会』 青木書店、一九七三。
- Miller, David L., 1985, *Introduction to Collective Behavior*, Wadsworth Publishing Company.
- 中野卓、一九六〇、「維新前夜の乱衆と家連合—御札降りといえじゃないか踊り—」『社会学評論』三八、一一四-一二七頁。
- 中筋直哉、一九九二、「巷に燃える火—日比谷焼打事件の火の意味—」『ソシオロギス』一六、一九五-二一二頁。
- 、一九九三、「東京の米騒動—民衆生活の重層と都市—」『ソシオロギス』一七、一一-一二頁。
- Neal, David M. & Brenda D. Phillips, 1988, "An Examination of Emergent Norms and Emergent Social Structures in Collective Behavior Situations." *Sociological Focus*, Vol.21, pp.233-243.
- 二村一夫、一九八八、『足尾暴動の史的分析—鉱山労働者の社会史—』 東京大学出版。
- Oberschall, A., 1978, "Theories of Social Conflict." *Annual Review of Sociology*, Vol.4, pp.291-315. = 塩原勉 (編) 『資源動員と組織戦略—運動論のパラダイム—』 新曜社、一九八九、五九-九一。
- Perry, J.B., Jr. & M.D. Pugh, 1978, *Collective Behavior: Response to Social Stress*, Minnesota: West Pub. Co. =

- 三上 俊治（訳）『集合行動論』東京創元社、一九八三。
- Reicher, S.D., 1984 "The St. Paul's Riot: An Examination of the Limits of Crowd Action in Terms of a Social Identity Model." *European Journal of Social Psychology*, Vol. 14, pp. 1-21.
- Shibutani, Tamotsu., 1966, *Improvvised News: A Sociological Study of Rumor*., Bobbs-Merrill. = 広井 脩（他訳）『流言と社会』東京創元社、一九八五。
- Snow, David A. & Phillip W. Davis, 1995, "The Chicago Approach to Collective Behavior.", in Gary Alan Fine (ed) *A Second Chicago School?: The Development of a Postwar American Sociology*., Chicago & London: The University of Chicago Press, pp. 188-220.
- 高橋 徹、一九八五、「後期資本主義社会における新しい社会運動」『思想』七三七、二-一四頁。
- Tierney, Kathleen J., 1980, "Emergent Norm Theory as 'Theory': An Analysis and Critique of Turner's Formulation.", in M.D. Pugh (ed), *Collective Behavior: A Source Book*., NY: West Publishing, pp. 42-53.
- ターナー、J・C / 蘭千壽（他訳）、一九九五、『社会集団の再発見—自己カテゴリー化理論—』誠信書房。
- Turner, Ralph H., 1964a, "Collective Behavior.", in E. Faris (ed), *Handbook of Modern Sociology*, Rand McNally, pp. 382-425.
- , 1964b, "New Theoretical Frameworks.", *Sociological Quarterly*, Vol. 5, pp. 122-132.
- , 1989, "Taxonomy as an Approach to Theory Development.", *International Journal of Mass Emergencies and Disasters*, Vol. 7, pp. 265-275.
- , 1990, "Some Contributions of Muzafer Sherif to Sociology.", *Social Psychological Quarterly*, Vol. 53, pp. 283-291.
- Turner, Ralph H. & Lewis M. Killian (=T&K), 1957/1972/1987, *Collective Behavior. 1st/2nd/3rd edition*, Prentice-Hall.
- Turner, Ralph H. & Samuel J. Surace, 1956, "Zoot-Suiters and Mexicans: Symbols in Crowd Behavior.", *A.J.S.*, Vol. 62, pp. 14-20.
- 吉田 竜司、一九九四、「群衆行動と日常性—釜ヶ崎第一次暴動を事例として—」『ソシオロジ』第三九巻二号、七五-九五頁。

付記 本稿は平成8年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

（よしだ りゅうじ・博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）

himself, he necessarily goes into the domain of collective conscience. We conclude that two problems concerning the concept of collective force and ecstatic experience result from the same; it is his notion of dualism of the human nature. In order to make the concept of force more exact and significant, we must construct another theoretical notion of human being.

The 'No Real Difference Approach' to the Study of Crowd Behavior: Controversies over Emergent Norm Approach and Their Implication to the Empirical Study of Crowd Behavior

Ryuji YOSHIDA

This article aims to reconsider controversies over Turner and Killian's "emergent norm approach" and point out their implication to the empirical study of crowd behavior.

Over the past few decades, most studies of crowd behavior have shared a similar view called "no-real-difference approach". This approach asserts the continuity between crowd and institutional behavior. Among this line of studies, Turner and Killian's "emergent norm approach" has been placed at the forefront.

At the same time, Turner and Killian's theoretical explanation has been the subject of some criticisms. They may be divided into four types: 1) the arbitrariness of their explanation of crowd member's motive, 2) theoretical discontinuity between micro-macro level, 3) unfalsifiability of their definition of crowd behavior, and 4) unclearness of the emergent norm concept.

The core of all the questions about Turner and Killian's theorization existed in the meaning they attached to the term "emergent": they tended to use this term with the connotation of "spontaneously novel". Because of this connotation, "emergent norm" concept served as a cure-all in explaining seemingly novel phenomena (crowd behavior). To quote D. Bloor's term, this concept was "asymmetrical". Instead of their emphasis on empirical reality of crowd behavior, this concept made their theory both tautological and reality detached.

In response to these criticisms, they modified the term "emergent norm" to "an emergent (revised) definition of the situation". This modification makes clear that the term "emergent" means "reorganized" conditions. Now we can estimate this modification makes

their central concept symmetrical. And securing the symmetrical continuity between crowd and institutional behavior is the ethos of the "no-real-difference approach". So with this revised interpretation of emergent norm, this approach could secure the symmetrical continuity at the conceptual level and we could use this concept to empirical study of crowd behavior.

Ideology and Patterns of Subjectivization

Kou KAWATA

After Althusser and Foucault, many people have discussed subjectiv(iz)ation, which is the process where ideology brings individuals into being subjects. Now, in my opinion, it is necessary to specify the concept of subjectivization and patterns of it. Here I investigate in particular some historical patterns of subjectivization, basing mainly on Foucault's genealogy of subject. I classify these patterns by focusing on two questions. 1/ What kind of representation do subjects refer when they make their self-reference? 2/ The position of ideology for subjects is whether external or internal? and whether universal or particular?

In my paper, I conclude that the subjectivization can be divided into three patterns.

1/ Religious Subjectivization; in which the subject's self-reference is ruled by the reference to transcendental representations, such as God. The ideology which authorizes these representations is still external and universal for subjects.

2/ Universalistic Subjectivization; in which the self-reference is indicated by the reference to universalistic ideas, such as Kantian reason. The ideology which legitimates these ideas is internal and universal for subjects.(e.g., Reason is supposed not to be external but to be internal for subjects.)

3/ Romantic Subjectivization; in which the subject's self-reference is based on the reference to representation of its own body, such as originality of each individual. The ideology which conceals the arbitrariness of the representation is internal and particular but not universal for the subject.

In the series of these processes, ideology loses its consistency and universality, and at the same time, it becomes more internal and particular for each subject. But there is no change between these patterns of subjectivization in the point that ideology always penetrates the bodies of subjects.